

浜松城跡 7次

2012年3月

(財) 浜松市文化振興財団



## 例　　言

- 1 本書は浜松市立元城小学校校地（浜松市中区元城町 102-1）で実施した浜松城跡の確認調査にかかる報告である。当発掘調査は浜松城跡の遺構残存状況を確認するために実施した。
- 2 浜松城跡は、過去において 6 次にわたる発掘調査を実施してきた。当発掘調査を浜松城跡の 7 次発掘調査とする。
- 3 当発掘調査は、セントラルパーク基本構想の策定に先立ち、浜松城二の丸および御誕生場における遺構等の状況を確認するために実施した。調査は、浜松市（主管：都市整備部総政課）の委託により、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）の指導のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。
- 4 当発掘調査にかかる契約期間は平成 23 年（2011）11 月 14 日から平成 24（2012）年 3 月 16 日までである。このうち現地発掘調査は、平成 23 年（2011）12 月 5 日から 12 月 22 日の間に実施した。調査面積は 200m<sup>2</sup>である。
- 5 現地発掘調査の指導は影山重広、仲川美津保（浜松市文化財課）が担当し、吉田悠歩（浜松市文化振興財団非常勤職員）が補助した。
- 6 整理作業の指導は、影山重広および鈴木一有（浜松市文化財課）が担当し、吉田悠歩の補助を得た。本書の執筆は第 1 章 1・2 を影山重広、第 1 章 3 を吉田悠歩が行い、その他の執筆と編集は鈴木一有が行った。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 8 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 9 本書では参考文献等の表記において以下のような略称を用いる。  
教育委員会→教委、（財）浜松市文化振興財団→浜文振
- 10 本書を作成するにあたり、藤澤良祐氏から出土遺物に対する教示を賜った。

## 目　　次

### 例　　言

第 1 章　序　論 ..... 1

第 2 章　調査成果 ..... 4

第 3 章　総　括 ..... 12

### 図　　版

# 第1章 序論

## 1 調査にいたる経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、市の中心部に位置し、天守曲輪を中心とする中枢部が、浜松市指定史跡として保護されてきた。浜松市では、史跡指定地とその周囲を浜松城公園として活用してきたが、平成23年度に策定を予定しているセントラルパーク基本構想（主管：浜松市都市整備部緑政課）では、浜松城公園を中心とした区域の整備が検討されることになった。構想対象地の多くは周知の埋蔵文化財包蔵地である浜松城跡と重なることから、その取り扱いについて浜松市緑政課と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が協議を重ね、まずは浜松城跡の元城小学校地（浜松城の二の丸、御誕生場に相当）において造構の残存状況を確認するための範囲確認調査を実施し、今後の計画にかかる検討材料を得ることになった。

確認調査は浜松市（緑政課）の委託のもと、（財）浜松市文化振興財團が受託し、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が指導にあたった。現地調査は2011年の12月5日から12月22日にかけて実施した。調査面積は200m<sup>2</sup>である。

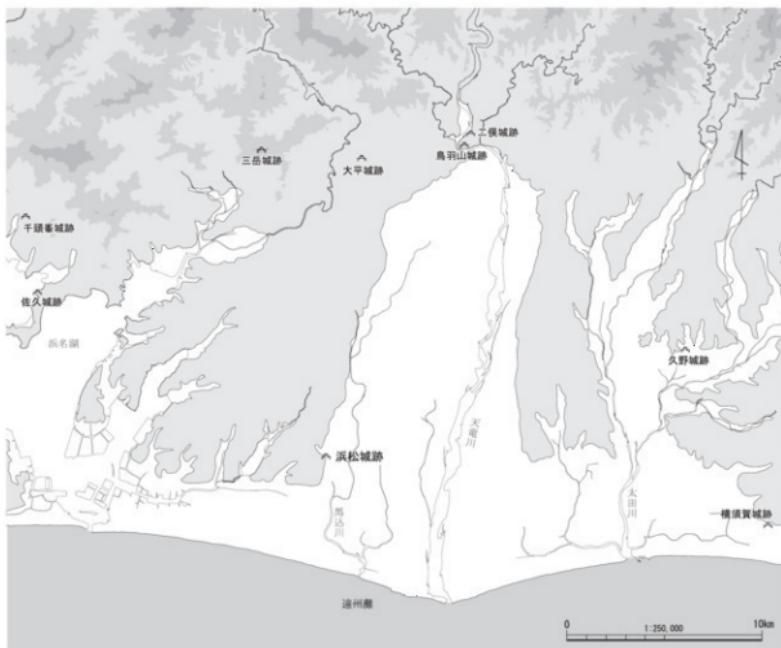


Fig.1 浜松城跡の位置

## 2 浜松城の歴史

浜松城は、三方ヶ原台地の東縁にある段丘を利用した平山城である。中世の天竜川の一部は、この台地の近くを流れしており、現在も馬込川（江戸時代には小天竜と呼ばれた）にその名残をとどめている。浜松城は、馬込川西岸における軍略拠点として、中世後半から近世にかけて重要視され、歴代城主によって拡張・改変が繰り返されてきた。

浜松城の前身は、15世紀頃に築かれた引馬城である。築城時の城主不明であるが、16世紀前葉には今川支配下の飯尾氏が城主をつとめている。この頃の城域は江戸時代の絵図で古城とされる部分にあたり、現在は東照宮が鎮座している。

永禄11年（1568）にはじまる徳川家康の遠江侵攻によって引馬城は拡張が続けられ、近世城郭に繋がる「浜松城」として変貌を遂げる。家康は、対武田軍の前線として浜松城の整備を進めた。城域の西端には本多作左衛門重次に由来する「作左」という地名が残り、この地からは、16世紀後半の陶器片が出土している。家康時代の浜松城の具体的な姿は不明確であるが、現在知られる浜松城の本丸や天守曲輪付近まで軍事施設が拡張していたことがうかがえる。

天正18年（1590）豊臣秀吉が小田原の北条氏を滅ぼし、天下統一を成し遂げると、家康は関東に移り、東海の諸城には秀吉恩顧の大名が配置された。浜松11万2千石には豊臣政権の三中老である堀尾吉晴が入り、浜松城は織豊系城郭として一新された。堀尾氏の時代において、多くの石垣が構築され、天守をはじめとする瓦葺きの建物が建てられたとみられる。

関ヶ原の戦いで家康が勝利すると、東海の諸城には再び徳川譜代の家臣が配置される。浜松には5～6万石ほどの領地が与えられることになった。浜松城は幕閣への登竈門として数多くの譜代大名が城主を務め、二の丸に建てられた御殿を生活と執務の場として使用した。

明治6年（1873）の廃城令の後は、浜松城の建物や土地が民間に払い下げられた。二の丸や三の丸は宅地化が進み、昭和24年（1949）には元城小学校が現在地に移転した。天守曲輪と本丸の一部は開発から免れ、1958年には復興天守が落成、1959年には浜松市の史跡に指定された。

## 3 調査の経過と調査履歴

**発掘区設定** 二の丸および御誕生場の遺構残存状況を把握するため、元城小学校校庭に調査区を設定した（Fig.3）。調査区は4本のトレンチからなり、校庭の南縁に沿って2本（1・2トレンチ）、西縁沿いに2本（3・4トレンチ）ずつ、L字形に配置した。なお、いずれのトレンチも、元城小学校校庭内に設置した測量点をもとに、国家座標を基準にした測量を実施している。

**調査経過** 調査は、まず1トレンチ、2トレンチの順に調査を行い、その後3・4トレンチを同時に調査した。1トレンチと2トレンチ東半では、地山直上で検出を行ったが、近代における改変が激しかった。江戸時代の遺構としては、不定形溝状遺構（SX01）と土坑を確認し、地山のすぐには江戸時代の整地層を確認した。2トレンチ西半、3トレンチ、4トレンチについては、表土のすぐ下で地山を確認し、地山直上で遺構検出を行った。その結果、4トレンチで戦国時代～安土桃山時代の井戸（SE01）を確認した。SE01からは、かわらけ、中国産青磁、中国産白磁、瀬戸美濃産の灰釉丸碗、灰釉皿、擂鉢、瓦（唐草文軒平瓦・三ツ巴文軒丸瓦・平瓦・丸瓦）が出土した。SE01の掘削は標高約12.9mまで行ったが、遺構保存のため底部に達する前に発掘作業を終えた。

**調査履歴** 浜松城跡は、これまで天守曲輪や本丸を中心に1～6次にわたる発掘調査と工事立会が行われてきた。これらのうち1～3次調査など1996年以前に行われた調査は1996年刊行の報告書（浜松市教委1996）にまとめられている。4～6次調査は、浜松市が策定した浜松城歴史ゾーン整備基本構想に関連して天守曲輪天守門および本丸富士見櫓を対象に実施した。これらの成果は、調査年次ごとに報告書を刊行している（浜文振2010・2011・2012）。本書で報告する発掘調査（7次調査）は、浜松城の二の丸および御誕生場を対象としている。



## 第2章 調査成果

### 1 調査区の設定

今回の調査では合計4本のトレンチを設定した。校庭の南縁（1・2トレンチ）と、西縁（3・4トレンチ）にそれぞれ2本ずつ調査区を配置した。すべての調査区において、元城小学校校内に設置した測量点をもとに国家座標に合わせた測量を実施している（Fig.3）。

### 2 検出遺構

**土層堆積状況** 対象地で認められた基本層位は、①現代表土層（小学校校庭整地層）、②明治時代から昭和初期の地層（戦災に伴う焼土層・搅乱層、戦前の整地層）、③江戸時代の整地層（褐色土層・褐色粘質土層・暗褐色砂層）、④地山層（橙色砂礫層）の4層に分けられる。2トレンチ中ほどに高低差1.2mほどの地山の段差がみられ、この段差を境に土層の堆積状況が大きく異なっていた。1トレンチおよび2トレンチ東半では、①～④の各層がみられるが、2トレンチ西半から4トレンチでは①表土層の直下に④地山層がみられる。下位面である前者が二の丸、上位面である後者が御誕生場にあたるとみられる。

**1トレンチ**（Fig.4）1トレンチでは近代（明治時代から昭和初期）の建物基礎と江戸時代の整地層および溝状の落ち込み（SX01）、土坑数基を確認した。とくに②に含まれる近代の建物の基礎構造が比較的良好に残存しており、地層の堆積もFig.4-2~15層と比較的複雑な状況を呈している。

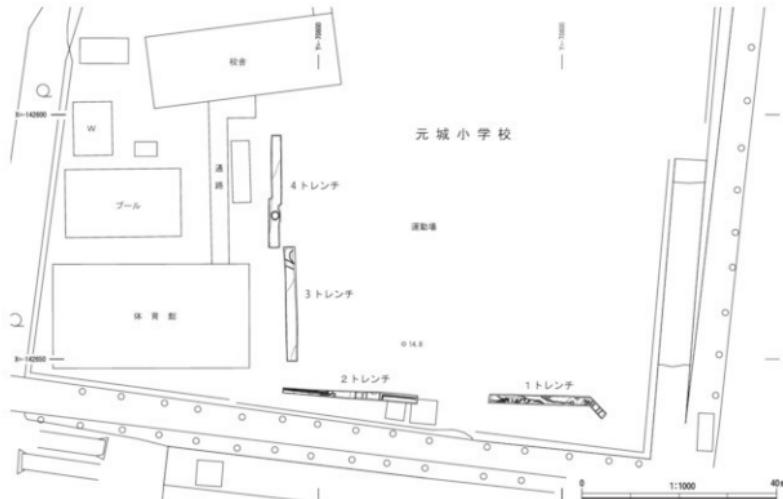
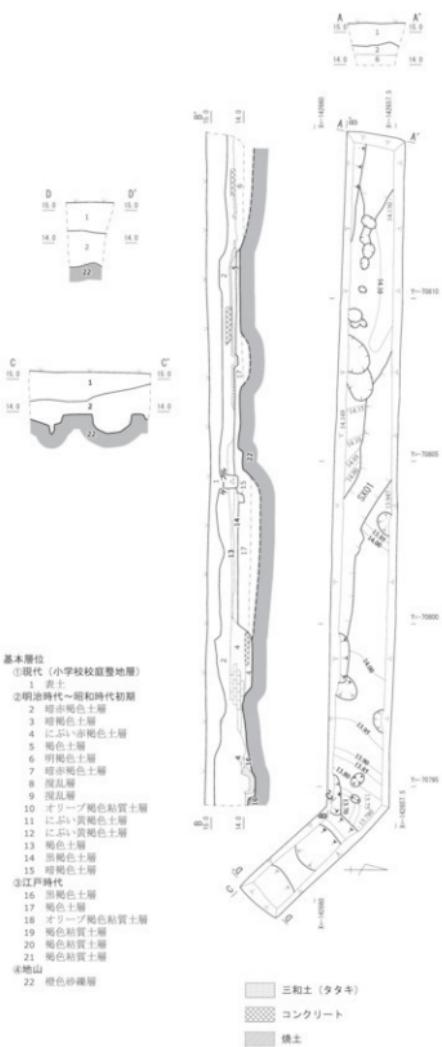


Fig.3 7次調査トレンチ配置図

1 トレチ



2 トレチ

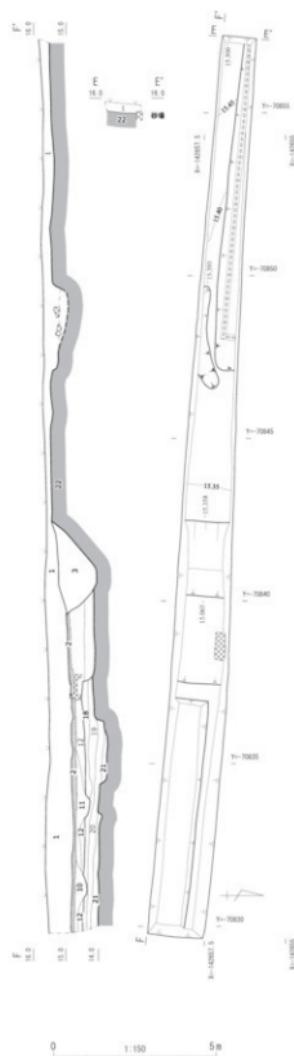


Fig.4 1・2 トレチ実測図

これらの地層中には、煉瓦やコンクリートでつくられた基礎や壁、および三合土（タタキ）が確認できた。近代の地層の最上層である2層は、暗赤褐色粘土層であり、焼土が多く含まれている。この焼土は、第二次世界大戦に伴う戦災によって形成されたものである可能性が高い。

近代に形成された層位の下には、江戸時代の遺構（SX01、土坑）および整地層（17層）が確認できた。17層中からは17世紀代の熔岩（Fig.7-2）が出土しており、整地が行われた時期の一端がうかがえる。SX01は北西-南東方向にある溝状の不定形遺構である。発掘区の外側にも遺構が及んでおり、何らかの施設を区画するような溝であった可能性がある。このほか、地山上において数基の不定形土坑を検出した。出土遺物は無かったが、土坑埋土の状態はSX01のそれと酷似しており、近世の遺構とみてよいだろう。

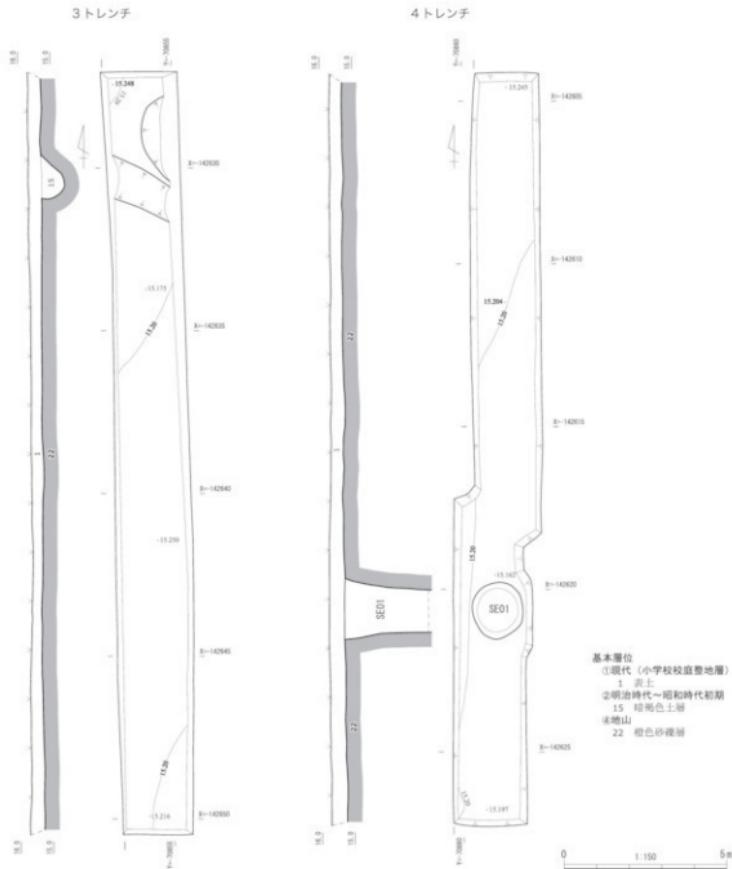


Fig.5 3・4 トレンチ実測図

**2 ドレンチ** (Fig.4) 2 ドレンチでは、調査区の中ほどで 1.2m ほどの地山の落差を確認した。東側の低位面が二の丸、西側の高位面が御誕生場にあたるとみられる。およその標高は低位面が 14.2~14.5m、高位面が 15.2~15.4m である。高位面では近世、近代ともに全く地層がみられず、当時の地表面は既に削平されているとみられる。低位面では、1 ドレンチと同様に近代と近世の地層を確認した。とくに近代の地層では最上位（2 層）における焼土の形成が顕著である。高位面では、目だった遺構は確認できていない。調査区の北西部では小学校の砂場を区画するコンクリートブロック列を検出した。

**3 ドレンチ** (Fig.5) 3 ドレンチでは、御誕生場に相当するとみられる高位面を確認した。地山を検出した標高は 15.2m 程度である。調査区の北端で溝や土坑を確認したが、いずれも近代のものである。

**4 ドレンチ** (Fig.5) 4 ドレンチでは、3 ドレンチと同様に御誕生場にあたると想定できる高位面を確認した。検出面の標高は 15.2m ほどであり、3 ドレンチとの標高差はほとんどない。次に詳述するように、調査区の南よりで 16 世紀後半の井戸（SE01）を確認した。

**井戸（SE01）** (Fig.6) SE01 は 4 ドレンチで検出した 16 世紀後半の井戸である。平面形は直径 1.6m ほどの円形を呈し、検出面から 2.6m の深さ（標高 12.7m 付近）まで確認した。石組みや木枠などを用いない、素掘りの井戸である。井戸の埋土下面（6 層）からは遺存状態が良好なかわらけが集中して出土しており、遺構・遺物保存の観点から底面までの調査は実施していない。また、井戸の南北両端部分についても埋土を発掘していない部分を多く残している。

井戸の埋土は大きく上下 2 層に分離できる。上位層は Fig.6 の 2~5 層で、拳大の礫を多く含む。下位層は Fig.6 の 6 層（茶褐色粘土層）で、比較的安定した堆積状況がみられる。下位層では、遺存状態が良好なかわらけ（22・23）、青磁碗（26）、灰釉丸碗（28）、天目茶碗（29）のほか、瀬戸美濃大窯第 3 段階（藤澤 2007、以下、大窯 3 期とする）の捕鉢や茶壺なども出土している。調査した部分では湧水層まで至っていないが、6 層は井戸の底面に近い堆積層とみてよいだろう。

SE01 からは Fig.7~9、Fig.8~10 ~36 の遺物が出土した。出土遺物が示す時期の下限は、大窯 3 期前半である。暦年代では、およそ 1560 年頃～1570 年代後半頃に相当する。

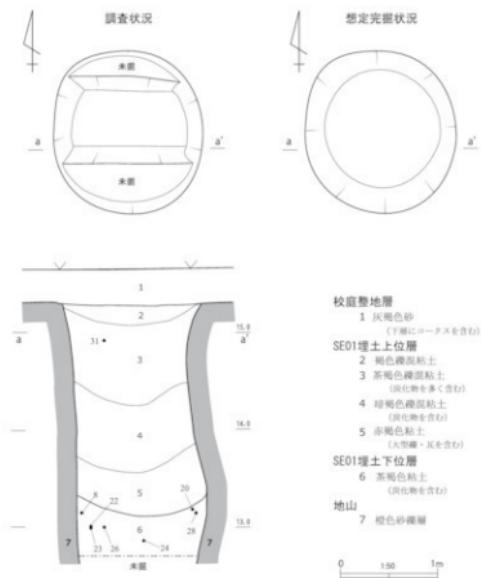


Fig.6 SE01 実測図

### 3 出土遺物

**1・2 トレンチ出土遺物** (Fig.7) 1・2は、1トレンチの17層から出土した土器である。1は非口クロ成形のかわらけである。口縁部は欠損しているが、直径12cmほどの大さとみられる。2は内耳をもつ培培である。わずかに内耳部分が遺存している。これらの遺物の年代はおよそ17世紀に相当するとみられ、17層が形成された年代の一端を知ることができる。

3は丸瓦である。1トレンチの17層から出土した。端部が弧状に抉りが入れられており、特殊な部分に用いられた瓦であることが分かる。凹面には比較的細かい布目の上に内タキ痕が残り、凸面にはナデ調整が施される。製作技法の特徴から近世の瓦とみてよい。

このほか、1トレンチの近代の地層からは陶磁器やガラス製品などが豊富に出土している。

4は2トレンチから出土した丸瓦である。凹面には単位が粗い布目が残り、凸面にはナデ調整が施される。製作技法の特徴から、3と同様に近世の瓦とみられる。

**4 トレンチ SE01 出土遺物** (Fig.7-8) 4トレンチで検出したSE01からは、大量の瓦 (Fig.7-5-9, Fig.8-33-35) をはじめ、かわらけ (Fig.8-10-25)、中国産青磁 (Fig.8-26)、中国産白磁 (Fig.8-27)、瀬戸美濃産陶磁器 (Fig.8-28-32)、瓦質火鉢 (Fig.8-36) などが出土した。

5は平瓦である。内外面ともにナデ調整が施されており、中央部には直径8mmほどの小孔が入れられている。6-9は丸瓦である。6の凹面には細かい布目と吊り紐痕跡が、7、8の内面には粘土塊から切り取った時に斜め方向のコビキの痕跡 (コビキA) が観察できる。8、9は玉縁に近い部分の破片とみられる。これらの遺物は製作技法上の特徴から16世紀代の所産とみてよいだろう。

10-25は土師質焼成のかわらけである。いずれもロクロ成形で、直線的な口縁が取り付く比較的大単純な形態をなしている。これらのかわらけには直径7.6cm~13.8cmまでの大きさの違いが認められる。かわらけは、いずれも色調は橙色を呈し、焼成具合も近似するなど、齊一性が高い。

26は中国産の青磁碗である。直径12.6cmほどとみられ、口縁部から体部にかけての6分の1ほどが遺存している。外面には線刻細蓮弁文が、内面には弧状の文様が施されている。形態的な特徴から、16世紀前半の所産とみられる。27は中国産の白磁皿である。直径12.3cmほどで全体の6分の1ほどが遺存している。ゆるやかに外反する口縁部をもち、低い高台が連接する。製作時期は26と同様に16世紀前半とみてよいだろう。

28は瀬戸美濃産の灰釉丸碗である。内外面ともに灰釉が施され、付け高台が連接する。大窯1期の所産とみられる。29は瀬戸美濃産の天目茶碗である。外面の釉薬が付けられる端部の破片とみられるが、遺存部分が小さく、細かい特徴をうかがうことは難しい。大窯3期から4期にかけての特徴を有している。30は瀬戸美濃産の灰釉皿である。28と近似した発色がみられ、大窯2期後半から3期前半に位置づけられる。

31、32は瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁は上下に拡張する形態をなしている。形態的な特徴から、31は大窯2期に、32は大窯3期に位置づけられる。

33は軒平瓦である。瓦当の約半分が遺存しており、唐草文がみられる。瓦当文様には團線があり、連続する3単位の唐草文が観察できる。中心飾りは欠損しており、不明である。外縁側面は瓦当文の團線付近まで、大きく削り取られている。瓦当文に團線がみられるのは様式的に古相の特徴であり、今まで知られていた浜松城の軒平瓦には類例がない。いっぽう、3単位の唐草文は天守門跡出土品 (浜文振 2011, Fig.12-28・29) などに類例があり、藤手状を呈する各単位の大きさや

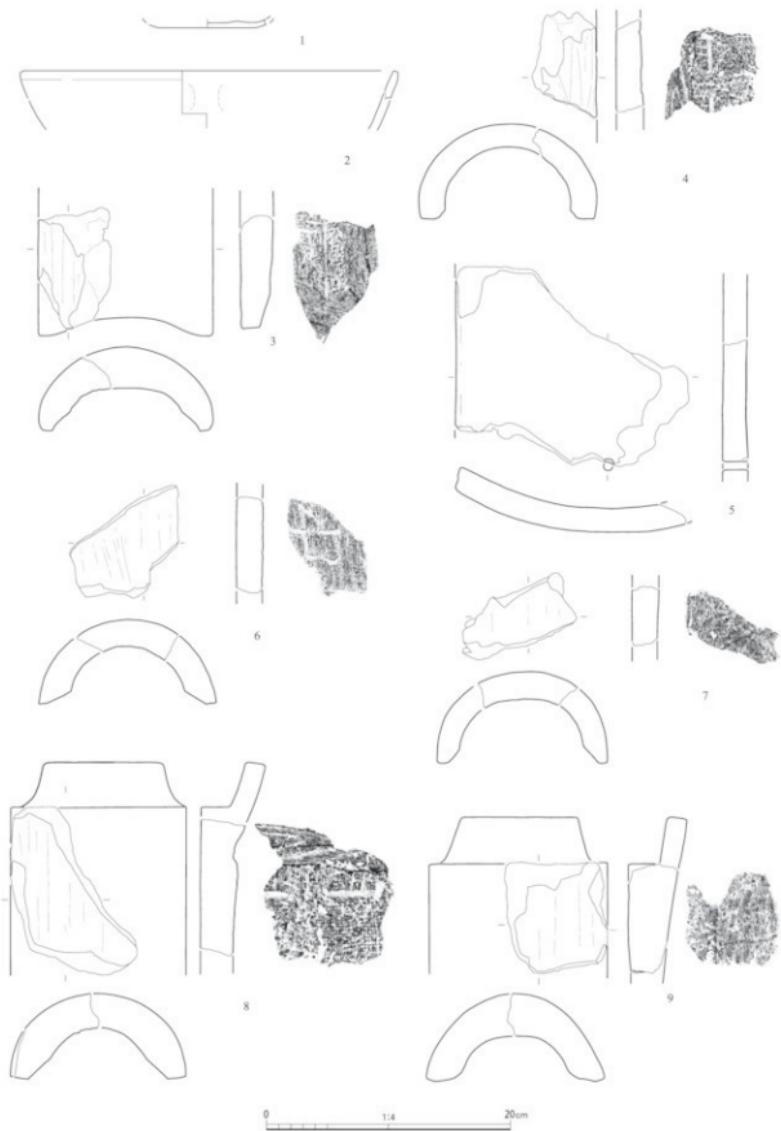


Fig.7 1・2・4 トレンチ出土遺物  
1～3:1 トレンチ 4:2 トレンチ 5～9:4 トレンチ SE01



Fig.8 4トレンチ SE01 出土遺物

形態、焼成具合なども似ている。33 と既知の浜松城出土瓦には、製作時期に大きな開きはないといえるだろう。この軒平瓦の復元図は、裏表紙に示している。

従来、浜松城に瓦葺建物が出現するのは、豊臣系大名である堀尾吉晴が入城した天正 18 年（1590）以後とみられていた（加藤 1993、浜松市教委 1996）。33 のように圓線をもつ軒平瓦は、既出の浜松城出土品中に知られておらず、堀尾吉晴入城後に採用されたとされる瓦類より古い様相をもつものといえる。SE01 において共伴する瀬戸美濃産陶磁器についても、その下限が大窯 3 期前半であり、曆年代では 1580 年代までは降らないとみられる。様式的に古相を留めることに加え、共伴遺物からも從来知られていた浜松城における瓦の採用時期より遡る段階の所産と捉えられる。その製作時期は不明確であるが、概ね 16 世紀後半でも比較的古い頃（大窯 3 期前半並行、1560 年～ 1570 年代）と捉えておきたい。

34 は軒丸瓦である。三ツ巴文がみられ、四面内面にはコビキ A 技法が観察できる。瓦当には外区につけられた珠文が 4 箇所分認められ、巴文の一部とみられる圓線状の円弧がみられる。欠損部分が大きいが、瓦当模様は堀尾吉晴在城期の所産とされる資料（浜松市教委 1996、図 13-34・35 など）に類似するものとみてよいだろう。製作時期としては 33 と同様に 16 世紀後半とみておきたい。

35 は玉縁部分が遺存する丸瓦片である。凹面には、細かい布目痕とコビキ A 技法が観察できる。凸面はナデ調整されている。

36 は瓦質の火鉢である。鍔状に開く口縁上面には花文が入れられている。内外面ともに丁寧な調整が施されている。

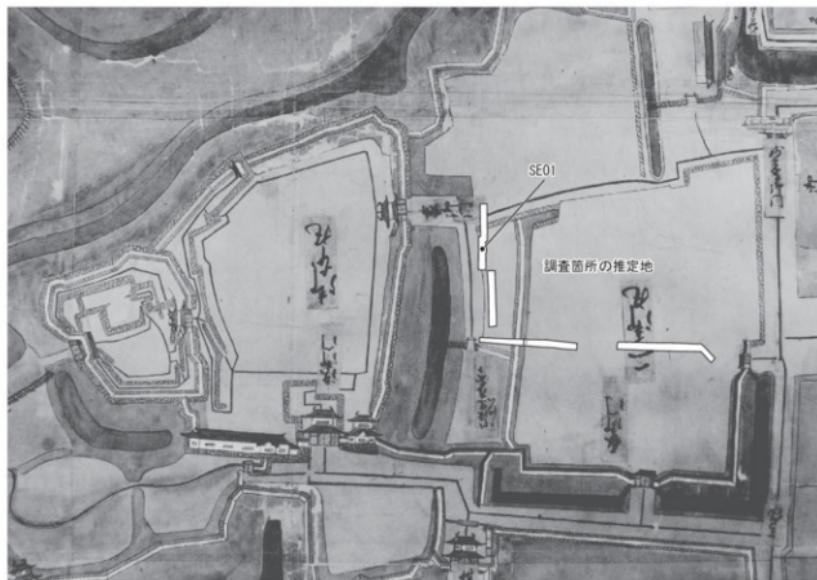


Fig.9 青山家御家中配列図（17世紀後半）にみる二の丸・本丸付近  
御誕生場には「御誕生屋敷と申し伝え候」との注記がある

## 第3章 総括

**二の丸と御誕生場** 今回の調査では、2トレンチの中ほどにおいて、1.2 mほどの地山面の落差が認められた。東側の低位面は二の丸に、西側の高位面は御誕生場にあたると捉えられる。御誕生場とは、徳川秀忠が誕生した屋敷があったと伝承されている場所である。『浜松御在城記』(17世紀後半成立)には「(天正七年(1579))四月七日、台徳院秀忠様ノ御童名御長丸様、今ノ御城内ニテ御誕生被遊候、御誕生所御座候由」との記載がみえる。遠州浜松城絵図(17世紀)には御誕生曲輪と記され、青山御家中絵図(17世紀後半)には「御誕生屋敷と申し伝え候」との注記がある。秀忠の誕生地としては浜松城下の別の地との伝承もあるが、城内の御誕生場は江戸時代を通じ二代将軍出生関連地として神聖視されていたことが分かる。また、御誕生場は近代以降、「中段」という字名が付けられており、二の丸からは明確な段差をもつ区域として周知されていた地域でもあった。

いっぽう、二の丸は、江戸時代には御殿が建てられ、歴代藩主の生活の場や藩政執務の中心として利用された。今回の調査では、江戸時代の溝や土坑等とともに、17世紀頃の造作とみられる整地層(Fig.4-17層)が確認できた。以上のことから、元城小学校の校地内には、江戸時代の遺構が広範に残存している可能性が高くなった。また、生活面が残っていない御誕生場でも井戸等の深い遺構は地中に遺存しているとみてよい。

**井戸 SE01について** 4トレンチで確認できたSE01は直径1.6 mほどの円形を呈する素掘りの井戸で、検出面からの深さ2.6mまで部分的な調査を行った。出土遺物には大量のかわらけや、中国産陶磁器、瀬戸美濃産の碗皿類、擂鉢、茶壺などの特殊器形、軒丸瓦や軒平瓦、火鉢などが含まれる。SE01の出土品のうち、下限を示す資料の時期は大室3期前半である。同段階の破片は井戸埋土の下層(6層)から多く出土しており、井戸が廃棄された時期は、おおむね大室3期前半に収

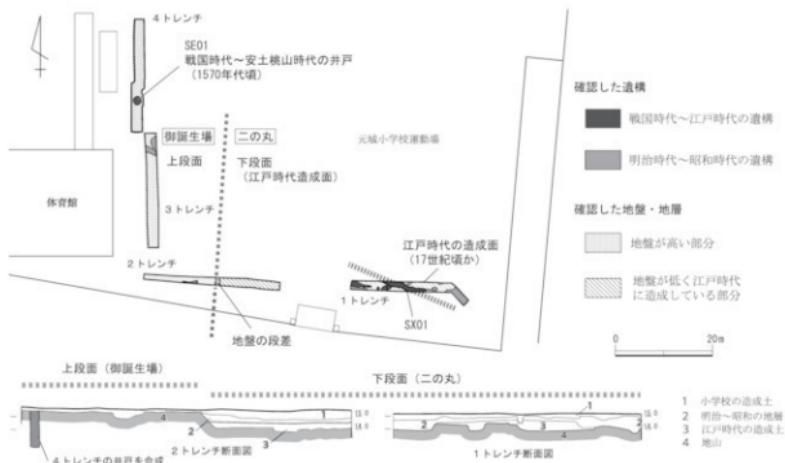


Fig.10 浜松城跡7次調査の成果概要

西暦	城主	地域の 支配者	関連出土品	7次調査の成果	おもなきごと
1565	飯尾貢連・乗達 ・達竜	今川氏	 	   	1560 (永禄三) 年 楠枝間の戦い 1565 (永禄八) 年 今川氏真、飯尾達竜を殺害
1570	 		   	1568 (永禄十一) 年 今川家康、浅江に母次 1570 (元亀元) 年 家康、浜松城築城開始 1572 (元亀三) 年 三方原の戦い、家康敗北 1578 (天正六) 年 浜松城築城 1579 (天正七) 年 爰山団と信康を殺害・秀忠誕生	
1580	徳川家康	徳川氏	 	   	1580 (天正十四) 年 秀吉の臣下となる 1590 (元禄十八) 年 秀吉、浜松城に開闢移封を命ず
1590 (城代) 菅沼定政	徳川家康			   	1598 (慶長三) 年 秀吉没する 1600 (慶長五) 年 開ヶ原の戦い 1601 (慶長六) 年 家康、東海道に伝馬制を制定
1600	堀尾吉吉・忠氏	豊臣氏		   	1616 (元和二) 年 家康没する 1619 (元和五) 年 德川綱疋、紀伊に移封される 1620 (元和六) 年 旗本内瓦錠
1601	松平忠頼				
1609	水野重伸				
1619	高力忠房				
1638	松平兼寿		 		
1644					
1655	太田資宗・資次		 		1655 (明暦元) 年 大風雨により、浜松城内に被害
					
1678	青山宗俊・忠雄 忠重				1675 (延宝三) 年 小天竜が赤助塙により締切り 1680 (延宝八) 年 大風により、浜松城内に被害
1700 1702	本庄(松平) 資俊・資訓				1691 (元禄四) 年 城内の屋敷で火災 1700 (元禄十三) 年 城内の屋敷で火災 1708 (宝永三) 年 城内の屋敷で火災
1729	松平信祝・信復	徳川氏 (将軍家)			
1749 1758	松平(本庄) 資訓・資昌				
1800	井上正經・正定 正甫				
1817	水野邦・忠輔		 		1822 (文政五) 年 鐓門棟樋を修理する
1845	井上正春・正直		 		1854 (安政元) 年 翌年にかけて2度の地震で被害 1860 (万延元) 年 天竜川が決壊し、城下に被害 1868 (慶応四・明治元) 年 戊辰戦争、明治改元

Fig.11 出土品の年代



Fig.12 浜松城の範囲と調査位置

まるとみてよいだろう。なお、SE01は最下層まで調査を実施していないので、その掘削時期は大室3期を廻る可能性もある。

大室3期前半の歴年代は、愛知県小牧城関連の新町遺跡や、滋賀県安土城下遺跡、愛知県清洲城下層遺跡などの年代観から判断して、おおむね1560年頃～1570年代に中心があるとみられる（藤澤2007）。大室3期前半の遺物を比較的多く含むSE01の使用期間は、大室3期開始期の画期に重なる桶狭間の戦い（1560年）以後、一定期間が経った後のこととみてよい。こうした年代観を考慮すると、SE01の使用から廃棄に至る年代は、徳川家康によって浜松城の城域が拡張された頃、元亀元年～天正元年前半（1570年代）と捉えるのが最も整合的であると結論づけられよう。また、出土遺物に古相の特徴をもつ軒平瓦が含まれる点も注目できる。浜松城築城以前に寺院など建物があつた可能性を考慮すべきであるが、徳川家康の浜松在城期に瓦葺建物があつたとみることも許されよう。

#### 参考文献

- 加藤理文 1993 「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城跡Ⅳ』袋井市教育委員会
- 浜松市教育委員会 1996 「浜松城跡—考古学的調査の記録—」
- （財）浜松市文化振興財团 2010・2011・2012 「浜松城跡4次」「浜松城跡5次」「浜松城跡6次」
- 藤澤良祐 2007 「総論 濱ノ大室の時代」『愛知県史』別編 廣葉2 中世・近世 濱ノ系 愛知県



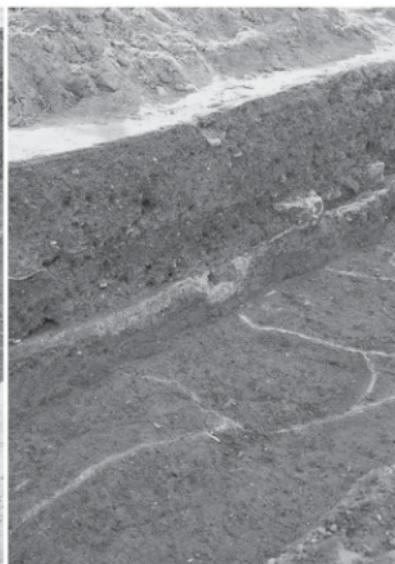
SE01 全景（東から）



1-1 トレンチ完掘状況（東から）



2-1 トレンチ断面(1)（北から）



3-1 トレンチ断面(2)（北から）



1 2 トレンチ完掘状況（東から）



2 2 トレンチ地山検出状況（東から）



3 2 トレンチ御誕生場・二の丸間の段差（東から）



1.3 トレンチ完掘状況（北から）



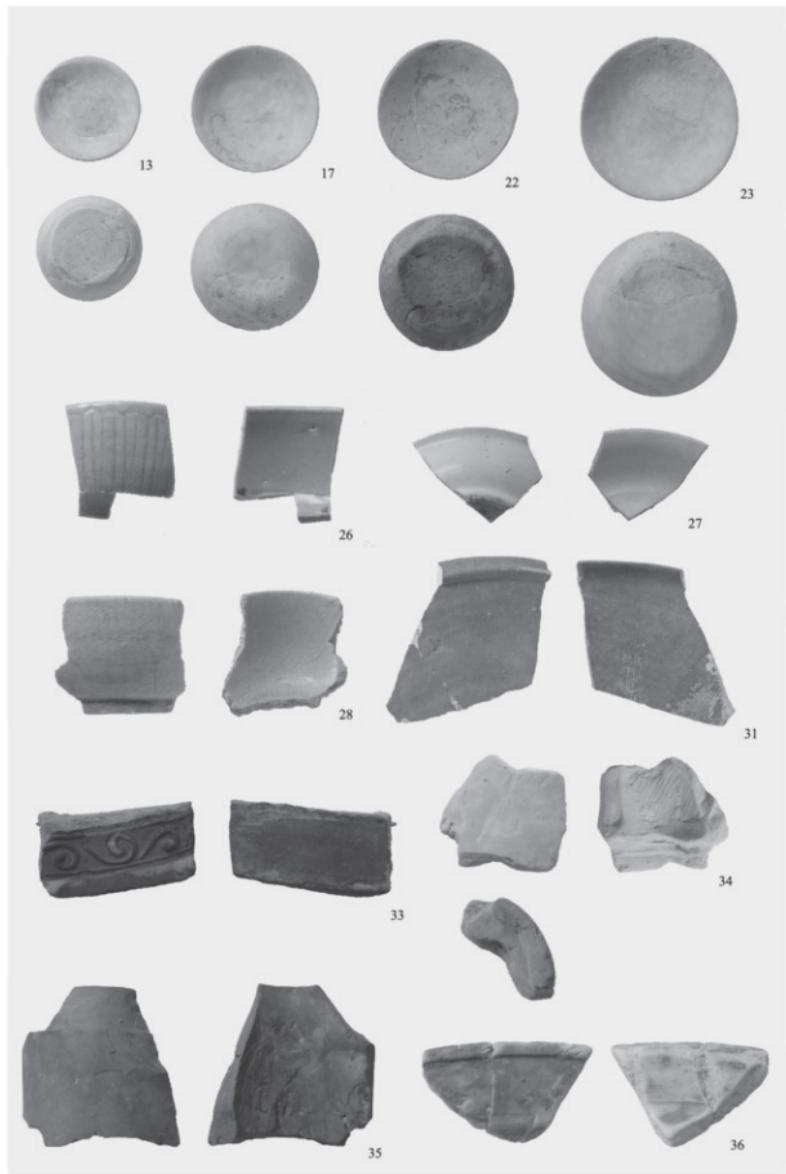
2.4 トレンチ完掘状況（南から）



1-4 トレンチ SE01



2 SE01 詳細



## 報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡 7次（はままつじょうあと 7じ）							
編著者名	鈴木一有（編）、影山重広、吉田悠歩							
編集機関	浜松市教育委員会 ☎430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） ☎430-0946 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	(財)浜松市文化振興財団							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元城町	22202	01- 04- 13	34度 47分 43秒	137度 43分 37秒	2011年 12月5日 ～ 12月22日	200m <sup>2</sup>	範囲確認 調査
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺物		特記事項		
浜松城跡	城跡	戦国時代 安土桃山時代 江戸時代		瓦 かわらけ 中国産磁器 瀬戸美濃産 陶磁器	二の丸と御誕生場の間の落差、および二の丸に位置する近世の包含層を確認 徳川家康在城期にかかる可能性がある井戸を検出			

### 浜松城跡 7次

2012年3月16日

---

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市市民部文化財課

(浜松市教育委員会の補助執行機関)

〒430-0946 浜松市中区元城町103-2

発行機関 財團法人 浜松市文化振興財団

印 刷 中部印刷株式会社

---

# Hamamatsu Castle

The 7<sup>th</sup> excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 16<sup>th</sup>-19<sup>th</sup>  
Century Castle in Western Shizuoka, Japan



March, 2012

Hamamatsu Cultural Foundation